プロフィール

所在地	和歌山県和歌山市
氏名	田島　文博
活動名称	障がい者スポーツにおける医科学サポート
こんな活動です	メディカルチェックをすればスポーツは万能薬
連携している団体等	スポーツ団体、病院・保健所、行政（保健・福祉部局）

活動分野
スポーツ
主な対象
障がい者・高齢者

活動の説明

①活動内容	１９９４年　産業医科大学医学部卒業、医師免許取得 同年-現在　大分国際車いすマラソン大会出場選手の研究に従事 １９９２-１９９４年　ニューヨーク州立大学バッファロー校リハビリテーション医学教室 Assistance prefeffor として障害者の運動生理学など研究 １９９４-１９９９年　日本リハビリテーション医学会障害者スポーツ委員会委員 １９９５-１９９９年　大分国際車いすマラソンクラス分け委員 ２０００-現在　日本障がい者スポーツ協会医学委員会委員 ２００２年　障害者スポーツ用メディカルチェックシート作成に参加 ２００３年　和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座教授 ２００４-現在　日本障がい者スポーツ協会医学委員会メディカルチェック部会部会長 ２００８-現在　和歌山県立医科大学スポーツ・温泉研究所所長 ２００９-現在　和歌山県立医科大学みらい医療推進講座げんき開発研究所所長 文部科学省認定特色ある先端科学研究施設に選ばれる ２０１２-現在　文部科学省認定障がい者スポーツ研究拠点に選ばれる ２０１４-２０１７年　和歌山県立医科大学附属病院副院長 ２０１５年　皇太子殿下の御行啓を賜る。御先導役を拝命。日本体力医学会会長 ２０１６-現在　日本パラ陸連医学委員会委員長 ２０１７年　日本リハビリテーション医学会副理事長（障がい者スポーツ担当を含む）
②活動体制	・和歌山県立医科大学リハビリテーション医学講座教授として障がい者スポーツ医学研究体制整備 ・日本障がい者スポーツ協会医学委員会副委員長として日本代表選手のメディカルチェック体制整備 ・日本リハビリテーション医学会副理事長として障がい者スポーツの普及発展に寄与 ・みらい医療推進センター長および那智勝浦町附置スポーツ温泉医学研究所所長としてパラアスリートの基礎生理学的研究と競技力向上に寄与。
③活動の効果等	・障がい者スポーツ関連研究英文論部５０編 ・文部科学省認定障がい者スポーツ研究所としてＳ評価をいただいた。 ・日本人パラリンピック代表戦選手が医学的問題で参加困難となる事例がなくなった。 ・障がい者スポーツ関連国際シンポジウムと国内学会を５回開催

活動の様子

プロフィール

所在地	愛知県名古屋市
団体名	日本車いすツインバスケットボール連盟
活動名称	文部科学大臣杯争奪 日本車いすツインバスケットボール選手権大会等開催
こんな活動です	重度障がい者でもできる、工夫された競技スポーツ
連携している団体等	高等学校、スポーツ団体、NPO 法人、企業・事業所、病院・保健所、行政（開催県・開催市）、大学

活動分野
スポーツ
主な対象
四肢に障がいや麻痺のある方
団体の規模（団体の場合のみ）
約 380 名 （連盟役員･登録選手･審判員･クラス分け分類部等）

活動の説明

① 活動内容	車いすツインバスケット競技は、重度の障がい者でもできるスポーツとして、日本で発祥した競技で、３５年の歴史があり、国内では３６都府県５０チームのほか、チーム登録はしていないが余暇活動やリハビリ訓練の一環として各地で実施されている。 毎年、地方大会、ブロック大会、日本選手権、全スポ等でのデモンストレーションゲーム等の開催 日本選手権の場合は、３６都府県５０チーム（１チーム約２０名の選手・コーチ等と介助者等約１０名）が地区予選を行い、１２チームが日本選手権に出場する。 また、四肢に障がいや麻痺があることにより、スポーツをすることや社会参加することなど、諦めている障がい者が、同じ障がいを有している者の勇姿を見ることにより、前向きな姿勢に変える動機付けとなる。 競技活動をするにともない生活力に自信がつき、地域行事への参加や就労などへ進展していくもので、重度障がい者の自立・社会復帰を果たす役割も担っている。
② 活動体制	日本選手権の場合は、日本車いすバスケットボール連盟・公益財団法人日本バスケットボール協会・公益財団法人日本障がい者スポーツ協会が主催となり、開催地域の団体(行政・企業・スポーツ団体・大学・高校等)が支援団体となり実施
③ 活動の効果等	大会等を通して、最重度の障がい者のスポーツの普及拡大、国民に対する障がいの理解促進、当事者の健康の維持向上・ＡＤＬの向上・ＱＯＬの拡大などが増進され、ＡＤＬの自立や社会的自立が困難な四肢に障がいや麻痺のある重度障がい者の社会参加の促進に繋げている

活動の様子

【円内シューターのシュート】

平成２９年６月に第３０回記念大会を開催！

【上シューターのシュート】

２組の上バスケットと下バスケットがあります。

プロフィール

所在地	東京都港区
団体名	一般社団法人日本車いすバスケットボール連盟
活動名称	内閣総理大臣杯争奪 日本車椅子バスケットボール選手権大会等開催
こんな活動です	クラブチーム日本一を決める、国内の車いすバスケットボール競技最高峰の大会
連携している団体等	スポーツ団体

活動分野
スポーツ
主な対象
肢体不自由
団体の規模（団体の場合のみ）
登録選手数　約 700 名

活動の説明

① 活動内容	全国 70 チーム、約 700 人の選手が日本車いすバスケットボール連盟に登録している。その中から全国 10 ブロックの地方予選を勝ち抜いた 16 チームにより日本一のクラブチームを決定する車いすバスケットボールにおける日本最高峰の大会である。大会期間中、同会場で体験講座も実施している。来場した一般観客に競技用車いすに乗ってもらったり実際に車いすバスケットボールを体験してもらったりすることで、障がい者への理解、競技の振興にも努めている。
② 活動体制	大会実行委員会を組織し、運営本部、審判、TO、クラス分け、ボランティア、運営施工などの各部門が大会にかかわっている。
③活動の効果等	40 年以上にわたり日本選手権を開催することで、車いすバスケットボール競技における風物詩として定着している。年々、チーム関係者ではない一般の観客者数が増加している。また取材に訪れるメディアの数も増加しており、それに伴いテレビのスポーツニュースで取り扱われる機会も増えている。車いすバスケットボールを通じて地域で自立して生活する障がい者が一般の目に触れる機会が増えることで、さらなるバリアフリー社会構築のきっかけとなることが期待される。

活動の様子

プロフィール

所在地	東京都台東区
団体名	日本障害者フライングディスク連盟
活動名称	全日本障害者・高齢者フライングディスク競技大会開催、全国での指導者養成講習会開催 等
こんな活動です	フライングディスクを通して、すべての人に感動を！
連携している団体等	日本障がい者スポーツ協会

活動分野
スポーツ
主な対象
すべての障害者
団体の規模（団体の場合のみ）
会員　約 2,000 名

活動の説明

①活動内容	1992 年～2000 年 全国知的障害者スポーツ大会（ゆうあいピック）で正式種目として実施（大会運営補助）。 1998 年～現在 全日本障害者・高齢者フライングディスク競技大会を開催（当連盟主催）。 毎年 950 名を越える様々な障がいの選手が参加し、盛大に開催されている。 2001 年～現在 全国障害者スポーツ大会で正式種目として実施している（大会運営協力）。 1998 年～現在 当連盟公認指導者制度を制定し、公認指導者養成講習会を開催。現在まで合計 375 回開催し、合計 10451 名が受講している。公認指導者は、現在約 6382 名(H29.3 月末現在)。 その他、各地域障害者フライングディスク協会設立(49 ヶ所)補助、各種障害者スポーツ関連の講習会への講師派遣等、障害者フライングディスク競技の普及活動を行っている。
②活動体制	各地域障害者フライングディスク協会と連携し、大会運営、指導者養成講習会の開催にあたっている。また、大会運営にあたっては、ボランティアの協力が欠かせないため、ボランティア向け審判講習会なども行っている。
③活動の効果等	これまでの普及活動により、全国で選手数が増加している。全国障害者スポーツ大会においては、陸上競技の次に出場選手が多い競技となった。また、若年層から高齢者まで幅広い愛好者がおり、生涯スポーツとしても認知されてきている。

活動の様子

全日本障害者・高齢者フライングディスク競技大会

指導者養成講習会

プロフィール

所在地	京都府京都市
氏名	桑原　教彰
活動名称	「京都府下の認知症他の障害を有する方の才能の発掘支援事業」
こんな活動です	誰もが持っている優れた才能を発掘して輝こう！
連携している団体等	社会福祉法人、企業・事業所、病院・保健所、行政（保健・福祉部局）

活動分野
文化
主な対象
知的障害

活動の説明

①活動内容	京都府向日市にあるグループホーム「てらど」に於いて、たとえ高齢者であっても、また認知症で記憶障害を有していても、昔に嗜んだお茶やお華を本格的に学べる場や、自分の人生を介護スタッフや家族と振り返る場を提供することで QOL の高い生活が送れること、また認知症ケアの質が向上することを、当時のグループホーム代表の土井輝子氏と共に示してきた。認知症の方はエピソードとしての記憶は残らなくても、情動の記憶は残ることに着目し、その人にとっての非日常、特別感を演出することで、学んだことを情動のレベルで積み重ねていくことで、認知症の方の人生を豊かにすることができるのである。 京都府丹後保健所とは、丹後圏域の 2 市 2 町にある 23 施設の福祉作業所からなる「はあとショップたんご連絡会」を通して、知的障害や精神障害を有する作業所の利用者の方と、デザインを学ぶ京都工芸繊維大学の学生が共に学び教えあう中で、利用者の方の創作物からデザインの才能を発掘する「たんごアート＆デザイン」という事業を推進してきた。利用者の方の創作物が新たな価値となり得ることを知ることで、利用者の方自身や支えるスタッフ、家族に自己肯定感、満足感が得られ、コミュニティにウェルビーイングがもたらされることを示した。
②活動体制	京都府向日市：グループホーム・てらど、機能強化型在宅療養支援診療所・土井医院 京都府丹後圏域：丹後保健所、京丹後市、はあとショップたんご連絡会、京丹後市障害者事業所製品販売連絡協議会
③活動の効果等	認知症になっても、一生涯学び続けることで生き生きとした生活が送れる、また軽作業に従事するのも難しい知的な障害がある方でも隠れた才能が発掘されることで本人が嬉しく思い、また家族を始めとする支える人たちの喜びに繋がる、ウェルビーイングに溢れる社会の実現に繋がる活動である。

活動の様子

グループホームでの本格的ないけばなレッスン

障害を有する方と学生とのデザイン価値共創

プロフィール

所在地	神奈川県相模原市
氏名	川口 吾妻
活動名称	『障害児のためのマルチメディア療育支援ソフト』の開発
こんな活動です	芸術と ICT の力で障害児者を支援
連携している団体等	杉並区立こども発達センター、(株)キャドセンター、東京女大学、国立障害者リハビリテーションセンター、各地の特別支援学校、知的障害教育校 PTA 連合会

活動分野
文化
主な対象
知的障害 その他の障害

活動の説明

① 活動内容	平成 15 年より女子美術大学での教育・研究活動の一環として、「芸術と情報先端技術」を活用しての、障害者支援、療育支援、特別支援教育のためのアプリケーション（以下アプリ）開発に取り組んできました。産官学連携で、大型タッチパネルディスプレイを使った障害児療育用システム「たっちゃんのコネク島」の開発。また平成 26～28 年度にかけては、文部科学省から研究開発の委託を受け、知的障害、自閉症など発達障害の児童生徒を対象に、防災教育、科目教育に活用できるタブレット型端末用アプリを開発などを行ってきました。 具体的には就学前のお子様向け『たっちゃんのコネク島』シリーズ、防災教育用アプリ『スキナのセレク島』シリーズ「まるばつクイズメーカー」、「バウンドボックス」、「すききらいカメラ」。防災＆コミュニケーションツール「チップス」を無料でリリース。その他、数々のプロジェクト活動を通して、障害児者の自立支援、障害の理解、療育支援のためのアプリ開発を中心に活動しています。
② 活動体制	女子美術大学川口吾妻が取組責任者として中心となり、発達障害や知的障害の支援を専門とする大学・研究機関。杉並区立こども発達センターといった障害者施設と連携協力。さらに ICT プログラム開発に実績のある（株）キャドセンターとの産官学協働で、障害特性に対応した教材開発を行なっています。連携協力校として全国各地の特別支援学校、教育委員会、全国特別支援学校知的障害教育校 PTA 連合会にもご協力頂いています。
③活動の効果等	**１．新たなコミュニケーション手段の提供** 障害者自らが災害から身を守る意識を育み、簡便な操作で周囲の人に理解してほしい自分を表現できるアプリを開発することができ、特別支援学校の先生方を中心に活用頂いています。 **２．効果の高い学習教材開発用ツールの提供** 児童生徒の個性や興味に合わせて画像を取り込み、教材作成できるため、これまで難易度が高かった教師による電子教材作成と共有が可能となりました。iPad 用アプリとして無料で公開しており、広く全校に普及し始めています。活用事例も報告されています。

活動の様子

『たっちゃんのコネク島』シリーズ
「直感的な操作」「失敗がない」「共感する経験」
子どもを伸ばしていく３つのコンセプトで作れています。

『スキナのセレク島』シリーズ
「まるばつクイズメーカー」、「バウンドボックス」、「すききらいカメラ」
（※iPad 専用のアプリです。）

プロフィール

所在地	大阪府大阪市東淀川区
氏名	大手 裕子
活動名称	「ＢＡ＋Ｃプロジェクト」 （ボーダレスアート＋コミュニケーション　プロジェクト）
こんな活動です	知的障害のある方の表現活動に学生が関わり、展示や、ワークショップの実施、共働による制作など多様な形の展開を 14 年にわたり継続して行っています。
連携している団体等	社会福祉法人

活動分野
文化
主な対象
知的に障害のある方

活動の説明

① 活動内容	障害者福祉施設の利用者の皆さんと大阪成蹊大学学生が表現活動を通して関わることにより、創作の場作り、造形的に新しい試み、商品としてのデザイン、制作や展覧会、ワークショップの実施等、多様な活動を展開してきた。支援対象人数は、年度ごとに 8～10 名程度。2017 年度は 14 年目となり、その間主に 3 施設と連携してきた。関わりがあった障害のある皆さんはのべ約 50 名。 2004 年～2007 年 社会福祉法人一羊会 武庫川すずかけ作業所（兵庫県西宮市） 2008 年～2011 年 社会福祉法人あらぐさ福祉会 障害福祉センター あらぐさ（京都府長岡京市） 2012 年～現在 社会福祉法人ノーマライゼーション協会 社会就労センター西淡路希望の家（大阪市東淀川区）
② 活動体制	活動の枠組みとしては大阪成蹊大学芸術学部の学部共通科目「プロジェクト演習」（学部の理念である「芸術による社会貢献を目指す」を授業内で実践するための独自の取り組みとして開学以来、多数の内容により開講を続けている。BA+C プロジェクトは当初より現在に至るまで継続して開講している）の授業として活動を行っている。受講対象者は、芸術学部の全コースの 3、4 年生のうち希望者。現在は、3 年次と 4 年次の 2 期にわたって継続しての活動も可能。活動にかかる費用は、授業で実施していることから、学部の予算の中で枠が設定、確保されている。
③活動の効果等	①授業枠の中で、大学を活動場所として定期的に表現活動が行えることは、施設では、利用者の日常外の特色ある活動として位置づけることができ、一定の評価を示すことができる。また施設によっては、以前はこのような表現活動を定期的に行うことができていなかったところもあり、本プロジェクトとの関わりがきっかけとなって表現活動が定着した施設もある。 （例：あらぐさ福祉会（京都府長岡京市）、特定非営利法人ほっと（吹田市）等） ②障害のある人本人にとっては、普段の日常と離れた環境で、学生と共に活動を行うということが大きな刺激となって、精神的にも身体的にも活発になり、生活面でも意欲的になられたという効果がある。また、表現活動の面においても家や施設において普段制作されているものと、学生との関わりの中で制作される作品とに顕著な違いがある方もあり、隠れた可能性を引き出すことにも繋がっている。

活動の様子

教室前の地面にチョークで巨大な街の絵を共同制作。

描かれたカラフルな絵を元にプリント生地を制作。

プロフィール

所在地	東京都江東区
団体名	株式会社りそなホールディングス りそなグループ Re：Heart 倶楽部
活動名称	全国特別支援学校文化祭
こんな活動です	真心込めた手作り表彰式で、めいっぱい楽しんでもらう
連携している団体等	全国特別支援学校長会、全国特別支援学校文化連盟、行政（文部科学省）

活動分野
文化
主な対象
視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、知的障害、病弱
団体の規模（団体の場合のみ）
16,860 名

活動の説明

①活動内容	・1994 年の全国特別支援学校文化連盟の設立にあたり文化振興のため第一回から現在まで継続して文化祭(全国の特別支援学校の幼児、児童、生徒の日頃の文化活動の成果を発表する場)の開催を支援しています。本文化祭には各都道府県より推薦された造形・美術、書道、写真の 3 部門の作品が出品され、優秀賞が選出されます(文部科学省の後援を 2016 年度から頂き文部科学大臣賞が新たに創設されました)。 ・2008 年から、本文化祭への支援活動の一環として、りそな銀行・埼玉りそな銀行・近畿大阪銀行の本社において入賞作品の展示会を開催し、来社される多くの方たちにご覧いただいています。 ・2013 年から、りそなｸﾞﾙｰﾌﾟ役員・従業員のﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ団体「Re:Heart 倶楽部」の発足を機に、受賞者の皆さんにりそなｸﾞﾙｰﾌﾟ東京本社にお越し頂き、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ有志による手作りの表彰式を開催しています。 ・表彰式では、ご家族など関係者が見守る中、全国から集まった受賞者お一人おひとりに表彰状や盾、記念品をお渡しします。表彰式の後は、社員食堂で交流会を開催、作品を見ながらお話をお聞きし、楽しいひと時を過ごします。その後、役員室や会議室等、銀行本社内の見学を実施しています。
②活動体制	・表彰式は、りそなグループの役員・従業員ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱが運営しています。 ・駅から会場までの案内や受付、会場での誘導などをﾎﾞﾗﾝﾃｨｱが担い、緊張の面持ちで来場した受賞者やご家族の皆さんにﾘﾗｯｸｽして表彰式を楽しんで頂けるよう明るくご案内します。 ・受賞者の皆さんや保護者、学校関係者の皆さんに安心して参加していただけるよう、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱﾒﾝﾊﾞｰは事前講習会で車いすの介助方法や手話などを学んでいます。車いすで実際に動き回るために必要なｽﾍﾟｰｽや坂道を下りるときの恐怖心を知ることや、手話での自己紹介や分かりやすい道案内などを学ぶことで、より適切な対応が可能となり、参加した皆さんとの交流も深まっています。
③活動の効果等	・受賞者のご家族や先生からは「一生の思い出になった。子どもたちの自信につながった」とのお声を頂いたり、春には進学の報告を新たに描いた絵とともに送ってくれた受賞者もいらっしゃったり、ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｽﾀｯﾌのﾓﾁﾍﾞｰｼｮﾝ向上にもつながっています。

活動の様子

表彰状の授与

交流会の様子

プロフィール

所在地	青森県青森市
団体名	青森県立保健大学「発達保障研究会」サークル
活動名称	飛び出せ!オープンカレッジ in 青森
こんな活動です	学生と交流を通して、様々なことにチャレンジしよう!
連携している団体等	社会教育関係団体、参加者の家族、グループホームの世話人、障害者就業、生活支援センター、大学

活動分野
学習
主な対象
知的障害
団体の規模（団体の場合のみ）
発達保障研究会サークル 現在 9 名所属

活動の説明

①活動内容	18 歳以上の知的障害者を対象に、学習だけではなく、大学生との交流を通して相互理解を育むことをねらいとした活動である。学びの場として、年に 2 回、日常生活に活かせる実践的な講座とリフレッシュを目的とした講座を行っている。参加者 2 名に対して、学生 1 名のボランティアをつけ、参加者全員が楽しく学ぶことができる工夫を行っている。学習だけではなく、近隣の公園でのお花見交流会（4 月）、大学祭に招待（10 月）、クリスマス会（12 月）など、学生との交流を目的とした活動も行っている。 本活動は、知的障害のある参加者が、自分の苦手なことやできないことは、学生ボランティアと一緒に行うことによって、達成できることを知り、様々なことにチャレンジしながら豊かに生きていくことを目的に行っている。そのため、プログラムを企画する際には、参加者の要望を取り入れながら、講座を担当する講師との事前打ち合わせにも力を入れている。
②活動体制	①基本的な活動体制は、発達保障研究会サークルの学生 9 名(顧問:西村愛)である。 ②講座の講師は、社会教育センターからの紹介や学内の教員である。 ③活動への理解や参加者を広げるために、顧問が、障害者就業・生活支援センターのワーカーと連携をとりながら、活動内容を紹介した冊子を配布してもらい、適宜、見学に来てもらっている。 ④参加者が安心してプログラムに参加する体制として、参加申込欄に支援者や保護者が本人の様子や体調について記載する欄を作成し、活動に参加するうえでの留意点について相互確認を行っている。
③活動の効果等	①参加者からの積極的な発言や要望が増えてきたこと。(学ぶって楽しい!) ②参加者の楽しみの場であること(学生と仲良くなりたい!!) ③共に生きる活動の実践(障害者の支援をする側としての学生と支援してもらう立場の参加者という固定した関係性の変化。参加者に会いたいからボランティアを希望する学生もいる)

活動の様子

参加者に大人気の音楽の講座

自分にできることを学ぼう(救急救命講座)

プロフィール

所在地	東京都小金井市
団体名	オープンカレッジ東京運営委員会
活動名称	オープンカレッジ東京
こんな活動です	日常生活に必要な“考えるわざ”を学ぼう
連携している団体等	社会福祉法人、大学

活動分野
学習
主な対象
知的障害
団体の規模（団体の場合のみ）
スタッフ約 40 名 受講生、毎年約 60 名

活動の説明

①活動内容	東京学芸大学で開催している主に知的障害のある人々を対象にした大学公開講座です。1995 年からスタートし、今年で 23 年目です。最初は東京学芸大学附属養護学校（現特別支援学校）の卒業生を対象とした継続教育の一環としてスタートしましたが、現在では、神奈川、千葉、埼玉といった近隣各県だけでなく、福島、新潟、京都、北海道などからも参加する受講生もいます。 例年、９月から１２月にかけて講座を４回、同じ年度の３月に講座の再学習機会である活動発表会を開催しています。受講生は毎年、変動はありますが、60 名程度が登録し、１回の講座には 40 名程度が参加しています。受講生には知的障害のある人々だけでなく、大学生や定型発達の人々も含まれています。 現在の講座テーマは「考える“わざ”を学ぶ」であり、日常生活で、特に自己決定に関わる力を身に付けることを目的に講座を行っています。2017 年度の講座は、身近にあるものの性質について科学実験を通して明らかにしていく「サイエンスラボ」、食材の比較を通して地域の特徴を知る「ディスカバーWorld」、日常生活で起きる問題（電車が遅れた時どうする等）を自分で解決する方法を身に付ける「日常生活の“考えるわざ”」、働く場所、生活する場所などの選び方を知る「大事なものを選択する“わざ”」といった４講座を実施しました。
②活動体制	オープンカレッジ東京運営委員会は大学教員、特別支援学校教員、社会福祉法人職員、特例子会社職員、学生など、約 40 名で構成されています。月に１度運営委員会を東京学芸大学で開催し、講座の作成に取り組んでいます。講師は基本的には運営委員会に所属しない大学教員に依頼しています。受講生の参加費のみで運営しています。
③活動の効果等	全ての講座で、受講生が設定した学習課題に自ら取り組めているか、評価しています。また、全講座、講座の最後にアンケートをとり、講座そのものの評価(楽しかったか等)と、次に何を学びたいかを調査しています。 「いつでも学べる、どこでも学べる」という生涯学習の理念を基に、大学だけでなく、地域の公民館などで取り組めるよう、学習内容のパッケージ化を進めています。

活動の様子

講座の様子：グループに分かれて活動しています。

「ディスカバーWorld」講座の教材：麺の比較を行っています。

プロフィール

所在地	大阪府堺市
団体名	大阪府立大学研究推進機構 21 世紀科学研究センター 教育福祉研究センター 大阪府立大学オープンカレッジ
活動名称	大阪府立大学オープンカレッジ
こんな活動です	学生主体で運営している知的障害者の通う大学です！
連携している団体等	社会福祉法人、企業・事業所

活動分野
学習
主な対象
18 歳以上の知的障害者
団体の規模（団体の場合のみ）
学生スタッフ 9 名 顧問教員 1 名

活動の説明

① 活動内容	知的障害者の大学進学率が低いという理由から、1998 年より知的障害者のための大学（教育を受ける場）としてオープンカレッジ（通称：オプカレ）を 実施している。①人権（教育）を保障し、②当事者の変化（発達）を保障することにより、③大学として地域社会貢献する、という３つの理念に基づき、大阪府内に居住する 18 歳以上の知的障害者に向けて、現在は 2 年間のプログラムを行っている。オプカレの講義はおおむね毎月第一日曜日に、大阪府立大学中百舌鳥キャンパスで開講しており、午前午後それぞれ 1 コマずつ（90 分）実施している。講義内容は、「学生」（オプカレでは、知的障害のある受講生を「学生」と呼ぶ）の希望に基づいて、福祉、美術、歴史など幅広い分野となっている。講師は大学教員や当該テーマに精通した社会人であり、スタッフ（大阪府立大学学生有志）との事前打ち合わせにより、「学生」に合わせた講義を提供している。また、座学だけでなく遠足、修学旅行、学園祭参加などの各種イベントでの交流や社会参加を行っている。これまでに参加した学生数は、140 名である。(1 期生：24 名、2 期生：29 名、3 期生：25 名、4 期生：25 名、5 期生：16 名。現在(2016-2017 年度)は、第 6 期生：21 名）
② 活動体制	スタッフが、教職員と連携しながら企画・運営を行っている。スタッフは、現在「総括」「講師係」「サポーター係」の 3 つの係に分かれている。講座開催時には「サポーター」と呼ばれるボランティア（大阪府立大学学生、他大学学生、社会人）が参加している。「学生」それぞれにサポーターがついて、学習をはじめ、活動全般を支援する体制をとっている。
③ 活動の効果等	オプカレに参加した「学生」は、高校卒業以降も学ぶことの楽しさを知り、オプカレ以外の場で、オプカレで学んできたことを生かすことや、新たな学びの場を見つけるなど学びの幅を広げている。また、スタッフやサポーターも 「大学で学ぶ」ことの意味を考え、知的障害のある「学生」とともに成長している。そして、本学の活動に賛同した大学関係者を中心に、1999 年度には武庫川女子大学、2000 年度には桃山学院大学 が続いて開講し、その後全国的な広がりを見せている。

活動の様子

6 期生の講義（健康と病気予防）の様子	6 期生の修学旅行（和歌山）での集合写真

プロフィール

所在地	島根県松江市
団体名	島根大学　知的に障がいのある人のオープンカレッジ in 松江実行委員会
活動名称	知的に障がいのある人のオープンカレッジ in 松江
こんな活動です	知的障がいのある人の教育の機会や発達の可能性を保障する取り組みです。
連携している団体等	行政（教育委員会）、松江市社会福祉協議会、松江市手をつなぐ育成会

活動分野
学習
主な対象
知的障害者
団体の規模（団体の場合のみ）
学生スタッフ 13 名 社会人スタッフ 6 名 （2017 年 12 月現在）

活動の説明

①活動内容	2008 年 10 月から２年を１期とした「知的に障がいのある人のオープンカレッジ in 松江」を島根大学松江キャンパスにて開催している。毎年の開催時期は 10 月と３月であり、それぞれ２日間ずつ開講している。オープンカレッジの受講生の条件は、18 歳以上の知的に障がいのある人であり、かつ島根大学の正門まで公共交通機関等を利用して来ることのできる人（家族や支援者の協力は問わない）である。 オープンカレッジは、全体講義と選択講義を組み合わせており、１日目は午前が全体講義、午後は選択講義、２日目の午前は全体講義、午後は交流会という流れを基本としている。また毎年３月には工場見学や博物館見学などの課外学習に出かける。講義は座学と演習を用意しており、選択講義は受講生自らが選択して受講することができる。講義や交流会等を通じて、受講生同士、受講生と学習サポーター、受講生と学生・社会人両スタッフ等がつながりを持てるように心がけている。講義の内容や課外学習の訪問先の選定の際は、毎回オープンカレッジの際に実施する受講生アンケートに記載されている希望を参考にしている。
②活動体制	実行委員会は、島根大学福祉社会コース学生らによる学生スタッフと、松江市社会福祉協議会、松江市手をつなぐ育成会の社会人スタッフにより構成されている。全体の企画は学生スタッフが中心となり、受講生募集、学習サポーター募集、講師探し、講義内容の調整まで幅広く取り組んでいる。実行委員会では、社会人スタッフから学生スタッフの活動に対する助言等がある一方で、講師探しや学習サポーター募集等の協力を依頼する場になっている。当日の運営は実行委員会のメンバー全員で行っている。
③活動の効果等	就学猶予・就学免除により義務教育の機会が制限されていた受講生や、卒業後に学ぶ機会がほとんど無かった受講生にとって、実現が難しかった「学ぶ」ことに対するニーズの充足につながっている。活動を通じて、受講生同士、受講生と学習サポーター、受講生と学生スタッフ等の人と人とのつながりができるため、受講生が地域生活を送る上でのネットワークに広がりができている。学生スタッフや講師、学習サポーターらにとっては、障害理解を深める機会になっている。

活動の様子

参加者全員での集合写真

全体講義の様子

～お知らせ～

文部科学省HPでは、障害者の生涯学習の推進に関する情報を公開しています！

是非ご覧ください！

http://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/gakusyushien/index.htm

障害者の生涯学習 検索

or